

ヤイロの娘と長血の女性の物語 (マルコ5:21-43) 釈義

——物語と自身の経験と 共同体との共有と語りかけ——

日本聖書神学校 4年 小川和孝

長い信仰生活で体験してきた、神の癒しの力、信仰のない家族にもおよぶ神の力を、関連するマルコによる福音書5章21-43節の釈義を通して理解を深めることが出来たら、これが本論文執筆の動機である。

入院中の抗癌剤の点滴6回の投与による苦しみの何回目かのインターバルの時に、妻から「昔、手を当てて、足首の捻挫を直してもらったから、肺癌も手当で直してくれる?!」と頼まれ、神に祈ることなく、両手を両方の肺のあたりに当てたところ、両方の腕の芯が冷えるように何かが吸い取られるようで、私は怖くなり「ごめん、怖いからやめるよ。」と手当をやめてしまった。体験から、長血を患う女性が癒されたイエスから注がれた「神の力」の理解を深めるため論文の主題とした。

2. ヤイロの娘と長血の女性の物語 (マコ5:21-43) 釈義

2. 1 マルコによる福音書における5:21-43の物語の位置・・・2p

I 宣教開始・・・3p

㊥ 律法と罪と癒しくイスラエルの民の福音> (1:40-3:19)

II この世における、神の力と悪の力の綱引き

② 神の支配と悪霊の支配 (3:20-5:43)

③ この世<悪の支配>への十二使徒の派遣と給食の奇跡<神の支配> (6:1-56)

III 受難～十字架～復活

① 受難 (14章) ⑪ 十字架 (15章)

2. 2 本文批評・・・4p

本ペリコーペにおいて、異読は数多く見られる。ただし、カイサリア型のΘ写本の異読が独自の読みを採る箇所が見えることには一定の注意が必要であろうが、ほとんどの箇所は「外的証拠」の基準により、また、残る箇所も多くの場合「内的証拠」のLectio difficilior potior (「より難しい読みがより有力である」) の基準によりNA28本文が支持されると言える。26節を例に挙げると

26節 τὰ παρ' αὐτῆς πάντα

δαπανήσασα τὰ παρ' αὐτῆς πάντα (「そのためすべてを使い果たし」) に関して以下のようにπαρ' αὐτῆςを書き換える異読が見られる。

τὰ παρ' αὐτῆς πάντα 彼女の身の回りのすべてを、①τὰ ἑαυτῆς πάντα 自分自身のものすべてを、

②τὰ παρ' ἑαυτῆς πάντα 彼女自身の身の回りのすべてを

παρ' ἑαυτῆςの方が、女性の物心の状態を説明できていると思うが、女性自身の身の回りの物だけではなく、彼女の身の回りの物すべてを使い果たしたと考えられるので、NA28の本文に賛同する。

2. 3 私訳・・・7p

私訳について新共同訳聖書と違ったもの、特に28節の

ἐλεγεν = λέγω の 動)直未完能3 告げる、言う、

ἐλεγεν γὰρ ὅτι Ἐὰν ἄψωμαι κἂν τῶν ἱματίων αὐτοῦ σωθήσομαι.

言っていた というのは なぜなら もし 触る またもし その 服 彼の 救われるであろう

28 なぜなら彼女は「彼の着る物に触りさえすれば、私は救われるでしょう」と言っていたのである。2. 5語釈を参照されたい。

2. 4 物語の構成・・・8p

- A. ①～③ <群衆とヤイロ。>① イエスを向こう岸で待つ群衆 5章21節、② ヤイロの娘の癒しを懇願する 5章22-23節、③ 群衆を後に、ヤイロの家に向かう 5章24節
- B. ④～⑦ <病の女性と群衆。>④ 群衆の中の女性が声なき懇願 25-26節、⑤ イエスの着物に触れ癒される 27-29節、⑥ イエスより力が出て、触った人を群衆の中に探す 30-32節、⑦ あなたの信仰があなたを救った 33-34節
- C. ⑧～⑨ <ヤイロの家族とイエスの3人の弟子>⑧ 「恐れるな、ただ信じなさい。」35-37節、⑨ 死にかけていない、眠っているのだ。38-40節、
- D. ⑩～⑪ <娘とイエス>⑩ 手を取って癒される 41-42節、⑪ この癒しが知られないように戒め、少女に食べ物 43節

2. 5 語釈・・・9p～14p

28節 λέγω: 「言う」、5:28のこの箇所では協会共同訳、新共同訳等々で「思う」と訳されているが、スピーチアクトで発話としての意味を明確にするため、原語通り「言う」と訳すこととした。

2.6. 釈義・・・15p

<テキストと【構成】>

【 B. 病の女性と群衆。④～⑦ 】

【 ④ 群衆の中の女性が声なき懇願 25節～26節 】

・12年という長期の不正出血の女性の登場、・多くの医者診断も徒労に終わり、貧困かつ病状悪化

【 ⑤ イエスの着物に触れ癒される 27節～29節 】

・女性のイエスへの接触（イエスの訪問を耳にし、群衆に混ざり後ろからイエスの着物に接触）
・彼女の血の源の枯渇

【 ⑥ イエスより力が出て、触った人を群衆の中に探す 30節～32節 】

・イエスの気づき、「わたしの着物に触れたのは誰か?」、・群衆の押し迫る中での弟子たちの応答
・イエスの反応：触れた人を見つけるため見まわす

【 ⑦ あなたの信仰があなたを救った 33節～34節 】

・女性の告白、・イエスの反応（娘よ、あなたの信仰があなたを救った。）

<コンテキスト概観>・・・16p

a) 全体的な関係*

登場人物はみずからの使用する言語に精通し、それを問題なく活用できることを前提とし、内的著者と内的読者もそれと同様であると仮定される。

b) イエスと登場人物との関係

1) 弟子 2) 群衆 3) 会堂司ヤイロ 4) 長血の女性

c) 内的著者と内的読者の関係

イエスの癒しに起きる諸状況の宗教史的な背景など、（とりわけガリラヤとユダヤにおける）ユダヤ人の宗教文化に関する知識を持っていると想定される。

<概要分析>（新約聖書解釈の手引き 7章スピーチアクト・伊東寿泰著による）・・・19p

テキストの文法的・統語的・語彙的特徴などに注目し、表面に見られる発話をまず特定する。

A. 群衆とヤイロ ②ヤイロの娘の癒しの懇願 5章22-23節

B. 病の女性と群衆 ④～⑦ 5章25-34節

この女性の「願望」に対するイエスの応答としての「行為」と「発語」は、内的読者に強い関心を抱かせる。・
・略・・・31節で「すると弟子たちは言った、『あなたはあなたに押し迫る群衆を見て、誰が私に触れたのか』
と言っているのですか」とあるように、群衆の多くは、その女性と同じようにイエスに触れようと彼に迫っていた
と思われる。

C. ヤイロの家族とイエスの三人の弟子 ⑧～⑨ 5章35～43節

弟子三人以外の同行を「許さなかった」というナレーションによって、ほかの弟子と群衆がその場所に留め置かれたことが示唆される。内的著者のこの記述により、内的読者は興味を持って読み進むことができる。

そして、ヤイロの娘の癒し（蘇り）の出来事は、知らせを受けたイエスの反応と発語、そして「癒し」における「発語」と「行為」についての興味と関心を高め、読み続けることを促す。内的著者は、5:43「このことを誰も知ることのないようにと彼らに厳しく戒めた」と記すが、このようにして三人の弟子以外と群衆をヤイロの家に連れてこなかった理由が説明され、内的読者を納得させることが試みられている。

<発語内効力>・・・21 p

発語者の言葉がそれを受けた相手にどう作用するのか。両者の上下関係によって同じ「来て欲しい」という求めは「懇願」と「命令」に分かれることになるが、このことを前提にしつつ物語におけるやり取りを概観する。

A ②ヤイロの娘の癒しを懇願する 5章22-23節

会堂司ヤイロによる発語および行為：娘の病気の癒しをイエスの足元にひれ伏して懇願する言葉と行為を伴う。

B ⑥イエスより力が出て、触った人を群衆の中に探す 30節-32節を例に発語ない効力について、記す。促しの発語およびアピール的な発語：イエスは自分の服を通して癒しの力が出たことに気がつくが、このことは「癒された人は誰か」という探索行為を引き出している。内的読者としては、イエスなら探さなくても誰が出血を患っている女性であるかは分かるはずであると思われるが、ここでは自分から名のらせる促しが示される。内的著者は、群衆に対して癒しの対象が会堂司のヤイロの娘だけではないということをアピールするための発語行為としても受け取ることができる。

イエスは自分から力が出ていったことをはっきりと知り、群衆の中を振り向いて、「わたしの着物に触れたのは誰か」と告げる。この発語はヤイロの家に向かう途中の出来事として記されており、群衆に混ざっている長血の女性が該当するが、問い自体は群衆全員にかけられている発語である。

31節で、弟子たちの発語内効力は、「あなたはあなたに押し迫る群衆を見て、『誰が私に触れたのか』と言っているのですか」という言葉により、群衆が押し迫ってイエスに触れているはずであるが、イエスから神の力を得てその中の一人だけが癒されたことが確認される。そこにいたイエスに触れていたはずのすべての人が癒されたわけではなく、長血を患っていた女性一人だけが癒されたことが際立つ。

B ⑦あなたの信仰があなたを救った 33-34節

救済的な発語内効力：イエスにより信仰を認められ救われたこと、そしてその信仰をもとに元気で暮らすようにと指示される。内的読者は、この女性がその後も元気で暮らしてゆくであろうことを予見し、その後の信仰生活がキリスト教会での信仰生活の模範となるようなものになると考えることになる。

<発語媒介行為>・・・24 p

発語媒介行為は、言葉を発することによって行われる行為と定義され、それは聞き手への（もしくは聞き手の中に引き起こされる）効果や力を指す。

A ③群衆を後に、ヤイロの家に向かう 5章24節

ヤイロの足元にひれ伏す懇願に対してイエスが言葉なしの対応でヤイロの娘を癒しに向かうことは、内的読者に

会堂司とイエスの関係性が密なものであり、会堂で教えているイエスをヤイロがラビとして尊敬し、癒しの実態も耳（目）にしていたことを想像させる。

B ⑦あなたの信仰があなたを救った 33-34節

「そこで女は彼女に起こったことを知って、恐れおののいて、やって来て、彼にひれ伏し、彼にその事実をすべて言った」という発語媒介行為が見られる。女性自身が服に触れて癒されたのをありのまま話したことは、イエスを信頼し服に触れて癒された出来事の体感的経験を神の力として認識したという面を強調する。ひれ伏してその事実をありのまま告白したことは、イエスに対するキリスト信仰告白と内的読者から同定されよう。

C ⑧「恐れるな、ただ信じなさい」 35-37節

「死を恐れることはない、イエス（私）を信じよ」と予想しながら、内的読者は少女がどうなるのか読み続ける。

C ⑨死んでいるのではなく、眠っているのだ。 38-40節

C ⑩手を取って癒される 41-42節

イエスが子の手を取って「起きなさい」という発語媒介行為があり、少女は起きる。イエスが手を引いて起こしたのではなく、命令行為という仕方で記される。内的読者は、手を取って「タリタ、クム」と言って起き上がらせたことは、出血の女性を癒した神の力が、今回はイエスの手を通して少女に注がれたと受け止めることができる。

<コミュニケーション戦略>・・・25 p

関係の行動指針（関係のある事は言え）、質の行動指針（真実・誠実であれ）、様式の行動指針（不明確・曖昧な表現は避けよ）、量の行動指針（必要以上の情報は与えるな）以上、4つの行動指針による分析。

このような様々な無理解を受ける状況とその中でもはたらいっている神の力との関係性が41-43節では集約される。イエスは会堂司を知っていたと思われる、関係の行動指針により、ヤイロの懇願を受け、その信仰を以て娘を救った。無理解の周囲の人々がいては神の力が発動しないため＜連れてこられたものは皆癒やされ（マル1：32-34）、無理解なものが居る場所から離れて癒やされている（マル7：32-33、8：22-25）＞¹、イエスは随行する者を絞り込んだ。娘が生き返った後も、そのままで理解されることが困難であるため、質の行動指針（神の力を理解出来ないため）により、この出来事を秘密にするよう厳しく戒めた。

会堂司ヤイロと長血の女性および周辺の人々との物語は、信仰を介して実現する神の力、イエス・キリストからの救いと、それにもかかわらず多く存在する無理解とがそれぞれの関係性の中で語るものであった。

3. まとめ・・・26 p

イエスは神の力（霊的な奥義）として、娘の病状を離れた場所であるにもかかわらず近くで見て触診しているように状況を把握できていることを内的読者は理解させられた。また、イエスの発話から、36節の「恐れるな、ただ信じなさい」という言葉に内的著者の手法が見えた。「恐れるな」という言葉によって、ここまで物語を読んできた中で、イエスの力が圧倒的なものであることが内的読者に予見される。そして「ただ信じなさい」と続けることで、内的読者は、イエスがヤイロの娘に行われる癒しの神のわざのために必要なことは、他でもなく父親の信仰であることを知らしめられる。内的読者にとっては、ヤイロの娘が死んでいたのか眠っていたのかが一義的な命題ではなく、ヤイロの娘が神の御子イエスによって生かされることが重要な結論となる。

ヤイロの娘の癒しと長血の女性の癒しの二つの物語をテクストレベルで分析し、内的著者はイエスが「触れたのは誰か」という言葉により、イエスがその人を憐れんで癒すより、早くイエスに憐れみを求める心で願った長血の女性を父なる神が、いわば憐れんで御子イエスの衣を通して癒したことを現しているとも言えよう。また、ヤイロの娘の癒しで内的著者は、ヤイロの娘が「すでに死んだこと」を知らされたイエスがそれでも「恐れるな」「ただ

¹ <>内は、論文にない説明。

信じなさい」と死への恐怖を超える信仰を強調する。そうして内的読者は、ヤイロの娘の癒しによって死を超える神を喜ぶことができたのである。この二つの物語を通して内的著者は内的読者に、憐れみを懇願する者に応答する神、死をも克服するイエスを体現したのである。

黙想的取り組み

1. 物語と自身の経験・・・28 p

身体から力が出ていく体験・・・28 p

異教による癒しの事例・・・28 p

現代でも他宗教においても癒しの奇跡は行われている。『アレティア』vol. 36（2002 年）の江口論考にこのような記述がみられる・・・28P

私の力が抜けていく体験は、肺がんの手当のその時だけであった。・・・29 p

2. 共同体との共有と語りかけ・・・30 p

長血を患う女性がイエス・キリストの衣に触れて、彼から癒しの力を受け取るということを、2022 年の現代においてどのように考えられるだろうか。イエス・キリストの衣、その衣に触れること、そして癒されることについて記してみたい。

人の内側から自然とキリストの香として醸し出されるのが霊性である・・・30 p

（ローマ 8:10）と聖書に記されているように、キリストは私たちキリスト者の中に内在しているとパウロによって言われている。・・・30 p

「衣」について・・・30 p

「あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。」（マタ 5:40）という勧告は、このことを頭において理解されるべきであろう。衣服は、その着用者の全存在を代表するものであり、「全存在を投げ出す覚悟」がこの勧告の中には含蓄されているのである。』²

ブルームハルトによる癒しについて・・・31 p

彼が罪に苦しんでいる人々に勧めることは、「誠実に自分のことを考えてくれる友人に、神の現臨のもとで、祈りつつ、自分自身を打ち開く」こと以外ではなかった。彼にとっては、ヤコブ書 5 章 16 節の「この故に、互いに罪を言い表わ」せという勧めの言葉の通りに、一人一人の罪の告白が重要なことであった。³・・・31 p

礼拝出席後の腰痛の回復の経験・・・33 p

『スピリチュアルケアを語る』⁴という書物には、宗教やスピリチュアリティが人の健康、病気回復に良い影響を与えるという研究で有名なアメリカのデューク大学の医学者ハロルド・コーニックの研究が本書で紹介されていた。

あなたの信仰があなたを救った・・・34 p

バルトが『教義学要綱』の中で信仰について「私は、もう自分自身に信頼しようとする必要はない。私は、私を信ずるのではなく、父・子・聖霊の神を信ずる」、「われわれは、われわれの信頼に値する方に対する信頼において、自由であることを許される」⁵と述べていることは、長血を患う女性の信仰と重なるのではないかと思われる。

家族愛や隣人愛を行う、イエス・キリストを信頼する信仰の癒し・・・35 p

また、中風の人を癒す際に、マコ 2 章 5 節で「イエスは、その人たちを見て」とあるように、中風の本人の信仰ではなく、連れて来た人たちがイエスを「神の力」で癒す方であると信じて訪ねた隣人への信仰による愛の業が、中風の人の癒しにつながった。隣人たちによって形成された信仰・信頼も癒しの発動の要因であったかもしれない。

<黙想のまとめ>・・・35 p

以上のことから、信仰による愛の行為によらなくては癒されることはないと言える。しかも本人の信仰にとどまらず、家族や隣人による信仰に基づく愛の行為によらなくては癒されることはないと考えられる。中風の人の癒しでは 4 人の男たちが、満員で家の中に入ることができない状態のためイエスがいる辺りの屋根をはがして穴をあけ病人の寝ている床をつり降ろしたというほどの行為が見られる。

2022 年の現代にあっては、キリスト者である教会員が群衆になっていないか、障害者や病人が教会に入ることを阻んではないか、教会員の各自が問われる、障害者や病人を受け入れられる教会を形成することも、信仰による愛の行為につながるのではないかと考える。

² 相澤一「神の民の装い」『アレティア』No. 40 日本キリスト教団出版局：17 頁。

³ 井上良雄『神の国の証人 ブルームハルト父子』新教出版：105 頁。

⁴ 『スピリチュアルケアを語る・第三集 臨床的教育法の試み』関西学院大学出版会：128.129頁。

⁵ 『カール・バルト著作集 10 教義学要綱』井上良雄訳 新教出版：20 頁上・下段参照。